

都市郊外部において地域福祉実践に携わる専門職が抱く地域観の可視化 —「地域マインドマップ」作成による地域像の再構築のために—

東根ちよ 吉田直哉
大阪公立大学大学院

<要 旨>

本研究は、都市郊外部である X 市において、地域福祉のアクター間の地域像を創出するアクションリサーチの実施を目指し、福祉プラットフォームとしての「地域」の構築を促進するプログラムを開発する前提作業として、専門職の有する地域観の可視化を図ることを目的とした。

具体的には、①地域福祉研究における「都市」をめぐる先行研究レビュー、②都市郊外部において地域福祉実践に従事する専門職の抱く地域観に関するインタビュー調査、③ ②を踏まえた地域マインドマップの作成の 3 つを行った。

結果、先行研究レビューでは、「都市」に対する規範的・否定的な見方が固定化する傾向にある一方で、インタビュー調査では、専門職が、先行研究レビューよりも広いパースペクティブから、日々主体的に地域観を醸成していることがうかがえた。先行研究には含まれない、地域に内在する権力構造、地域福祉実践のリーダー構成員のジェンダー不均衡、地域ごとの生活文化の多様性と生活文化がもたらす地域のセグメント化などが、専門職の地域観を構成している。今後は、地域観の構成要素のマインドマップ化による可視化を進め、専門職同士で地域像を協働的に創出するためのプログラムの開発に挑む。

<キーワード> 地域福祉実践、地域像、都市論(都市社会学)、郊外、マインドマップ

【はじめに】

2000 年代以降、地域福祉の考え方が社会福祉のなかで重視される傾向が強まる中、「地域」には、高齢者のみならず障害者、貧困者、外国ルーツの住民、育児中の家庭など、さまざまな質の福祉ニーズに応じられる包括的な福祉プラットフォーム(地域共生社会)としての機能が期待されている。しかし、福祉プラットフォームとしての「地域」は、既存の地域コミュニティと完全には重なり合わない。特に、都市郊外部では、家族の脆弱なケア機能と旧来型の地域コミュニティの不在を受けて、福祉プラットフォームとしての「地域」を、

既存のコミュニティを編み込みながら新しく構築していく必要に迫られている。

都市郊外部における地域福祉に関与しうるアクターとして、社会福祉協議会、NPO などのインフォーマル組織、行政などのフォーマル組織、地域内外から参画する外部の専門家などが考えられる。しかし、住民主体原則のもと、住民こそが地域福祉の主要な主体だとしてきた従来の地域福祉研究では、住民たちが地域の現状や将来像について話し合う場において、これらの専門職にはいわば「裏方」として、地域について語ることは抑制的になることが、暗黙裡に期待されてきた。

その結果、専門職自身の地域観や、どのような地域をつくっていきたいと思っているのかについて、意識化したり、語ったりする機会の必要性は論じられてこず、そのような語りの場が設けられる機会も稀少なままにとどまっている。このような従来の地域福祉研究に対し、本研究では、住民と共に地域について語り合い、共同的な地域像をつくり上げる重要な共主体として、専門職を積極的に位置づけ、専門職自身の意識(イメージ、コンセプション)に焦点化する。

以上を踏まえ、本研究は、都市郊外部に位置するX市において、地域福祉のアクター間の地域像を創出するアクションリサーチの実施を目指し、福祉プラットフォームとしての「地域」の構築を促進するプログラムを開発する前提作業として、専門職の有する地域観の言語化、可視化を図ることを目的として設定する。

【研究方法】

前述の目的を達成するため、本研究では、①地域福祉研究における「都市」をめぐる先行研究レビュー、②都市郊外部において福祉実践に従事する専門職に対する、地域観に関するインタビュー調査、③②を踏まえた地域マインドマップの作成の3つの方法を用いた。

【結果】

1. 先行研究レビュー

本研究では、まず、地域福祉研究が「都市」をどのように捉えてきたのかを、論文レビューを通して明らかにした(東根・吉田 2025, 吉田・東根 2025)。「都市」研究に着目するのは、都市郊外部に関する言説は、都市論として提示されてきたからである。論文レビューの対象期間は、1970年か

ら2023年である。始点となる1970年は、岡村(1970)が刊行され、「体系的な地域福祉研究」が開始されたエポックと考えられている(岩田 2011: 5)。レビュー対象となる論文の検索には、CiNii(NII 学術情報ナビゲータ)を用いた。タイトルにおいて、「地域福祉」および「都市」の双方をキーワードとし、検索・抽出を行った。

結果、先行研究レビューでは、1980年代半ばを境に、都市像に緩やかな変化が見られた。高度経済成長期の余韻が残る1970年から1984年には、都市住民は多様性が高く、まとまりに欠けているという「アトム化」の言説(竹中 1970, 野々山 1980 ほか)と、画一化し大衆としてまとまっているという「マス化」の言説(一柳 1974 ほか)が併存していた。加えて、共有された価値観の喪失、すなわち「アノミー」化に伴う孤立・孤独を「人間性の喪失」、または「組織化を妨げるもの」として捉え、社会的病理・逸脱行動が集中的に発生する都市という批判的見方が固定化していくことがうかがえた。そのような都市像からは、都市の地域福祉は、実践上の多くの困難に直面しているという悲観的な言説が生じやすく、積極的な要素を抽出する言説の磁場が生じづらい状況にあった。

中成長期に入った1985年以降は、それ以前の一体的・総体的な都市像とは異なり、内部に多様性をはらむ、セグメント化されたシステムとしての都市像が示され始めた(鯉坂 1998, 金子 1990, 畠中 1992 ほか)。一方で、都市に対する規範的・否定的な見方も残存しつづけていた。2010年以降、動的に生成される非同一的な都市の特性を把握する試みは十分な成果を生み出せておらず、都市像は固定化・陳腐化している状況がうかがわれる。

2. インタビュー調査

(1) 調査の概要

つぎに、先行研究レビューを踏まえ、地域福祉に取り組む専門職が有している地域観を明らかにするため、インタビューガイドを用いたインタビュー調査(半構造化面接)を実施した。職務を行う際の地域の範囲、地域のイメージ、めざしたい地域のイメージに焦点化する質問を行った。

インタビューは協力が得られた X 市社会福祉協議会職員 2 名(A 氏: 50 歳代・男性、B 氏: 50 歳代・男性)、X 市地域福祉課の行政職員(福祉職)1 名(C 氏: 30 歳代・男性)、X 市の地域福祉(活動)計画の策定等に携わる外部の専門家 1 名(D 氏: 60 歳代・男性)の計 4 名であり、インタビュアーは第一著者(研究代表者)の東根である。

インタビュー調査期間は 2025 年 3 月～4 月であり、1 人あたりの時間は 60～90 分であった。IC レコーダーを用いて録音した音声データをもとに逐語録を作成し、各専門職の語りを解釈的に分析することで、地域福祉に携わる専門職が抱く既存の地域観の特質の解明を試みた。

倫理的配慮として、大阪公立大学大学院現代システム科学研究科研究倫理委員会の承認を受けた。なお、インタビューの実施、成果の取り扱いに当たっては、日本地域福祉学会研究倫理規程が遵守されている。

なお、以下で語りを引用する際には、匿名化を行うためインタビューに振付けたアルファベットと、逐語録のページ数により表記した。たとえば、A3 は、インタビュー A 氏の逐語録 3 ページ目を示している。

(2) 語りにおける地域観の特質

①権力構造が内在する地域

第一に、4 名に共通する語りとして、地域コミュニティに内在する権力構造を捉える視点が存在した。このような権力構造は、地域に「まとまり」を生じさせる側面があるという認識が示される一方、地域福祉を阻害するものとしても認識されている。このような認識は、先行研究レビューでは注目されてこなかったものであった。専門職は、そのような既存の権力構造と、自らの間の適度な距離の維持に腐心しているという。

自治会と連合って、やっぱ、二重支配みたいな関係になるんですね。どっちかいうたら連合から下ろしてくるみたいな感じで。古い地縁組織のあしき習慣っていうのは結構残ってて、それを改善しようとしてるのは分かるんですけど、時代の早さについていけないかなという気はします。一方で、職業で考えると、つながりをつくりましょうって言ってるんで、矛盾はしてますね。(B6)

もともとの地縁組織が強くて、ある意味権力性も持ってて。いうようなところと、ある意味ですごいドライなんですよ。… 何か新しい事業をしようすると、当たり前のように自治会であつたりとかそういう地縁系の組織に入れておくっていうことがないと、その事業自体がポシヤる可能性もあるっていうような。(C3)

そういう意味では、… あの強さっていうのはすごいなと、良くも悪くもね。… いわゆる、そういう、怖いという言い方はおかしいですけども、権力っていう言い方はあれですけども、責任も含めて、校区でやるという仕組みが確立をされてるっていうところは、ある意味では権

力っていうことになるんでしょうけどもね。ということが、ずっと長年にわたって作られてきてるって。…ただ、決定的にそこがしんどいの、そこで、じゃあ、何かを議論するのかっていうと、そういう仕掛けでも、多分、なくて、昔からこうやねんっていう話でもってやっているとあるところがあると思うんで、そこをどうするかっていうのは、地域福祉の、特に、いろんなことに対応してくことになったときに、大きな課題としてある。…逆に、だから、それだけの権力がないと地域がまとまらへんっていうところもあったんだろうというふうに思ったりもするし。(D9-11)

以上のような、必ずしも可視的でない権力構造が内在する地域という語りの文脈において、次のように、権力構造を溶解させる担い手(ゲームチェンジャー)としての女性リーダーという語りも見られたことが注目される。このような認識についても、先行研究レビューからはうかがえない点であった。地域における権力構造が、男性中心に構成されていたことに対して、女性の参画が異質性として捉えられ、地域の権力構造を変容させるポテンシャルを有しているというのである。

女性の中では自治会やったりとか積極的に PTA やってる人もいてはいますけど、やっぱり、あまりやらへんやろなと思いますね、今の体制では。(B6)

ほんまにその地域によるのと、あとは、だから、そうなったときに、女性リーダーの役割っていうのはすごく大きいなと思っててね。そこは女の人でも、そら、リーダーとなる人っていうの

はすごい強いんですけども、でも、そこはうまいといえうまいですよ。…今までは、どうしても自治会っていうのが、言うたら、家単位での組織なので、世帯主というか、男性が自治会についていう話だったけど、それがだんだん変わってきてますよね。(D11)

②「アトム化」と「マス化」が混在する地域

第二に、先行研究レビューと同様の傾向が見られたのが、アトム化とマス化の双方から地域を捉える視点である。具体的には、アトム化する住民を「まとめる」必要があるという認識が語られる一方で、マス化が進展することで画一化するニュータウンでは同質性・均一性が高まり、地域の核となるべきシンボルないしそれに依拠する共同意識が失われ、住民の「よりどころ感」がなくなるという認識が語られていた。その懸念は、地域の独自性の不在という文脈で語られる。

高齢者も含めた孤立・孤独ですよ。これからは高齢者で本当に身寄りのない方もたくさん出てくると思うので、そういった方にどうアプローチしていったらいいのかっていうのは一つ大きなテーマになってくるかとは思います。(A10)

都市型なのでどうしても、福祉委員会[自治会、民生委員児童委員会、ボランティアなどにより構成される地域福祉活動に取り組む地域住民の組織]もそうですけれども、なんで[X市を含む圏域]が全国に比べて発展してるかというと、小学校区単位でまとまりやすいからなんですよ。ある程度の、小学校区単位であれば、町会も8つから10とか、それぐらいの所もあり

ますし。X の場合はある程度、民生委員さんとかもそうですし、もう全部、小学校区単位になるんです。(A1)

よりどころがありませんよね、Y ニュータウンって。祭りとかもそうですし、アイデンティティーっていうか、そういうのがやっぱり新しい町って、つくり切れへんかったんだろ
うなと思うんです。… どれも一緒なんですよ
ね、画一的っていうか、学校があって、医療センターがあって、ショッピングセンターがあって。
にぎわってる頃はよかったんですけど。… だ
から人とのつながりも、みんなのアイデンティ
ティーっていうか、みんなのシンボルとか、み
んなで大切に作るものみたいなんがあったほ
うが、分かりやすくつながれるかなとは思っ
りする。(B10-1)

③住民(居住者)主体に対する認識の変化

第三に、地域福祉研究において重視されてきた住民(居住者)主体については、インタビュー調査においても重視されていたが、同時に、より広いパースペクティブから、複数のアクターが把握されていた。具体的には、社会福祉に関わる専門機関、行政、企業に加え、(住民ではないが)X 市で働く人も含まれていた。住民を核としながらも、非-住民を巻き込んだ、より広範で緩やかな福祉ネットワークが想定されていた。そのような拡張的な地域福祉ネットワークを再構築していく主体として専門職自身が位置づけられていた。輻輳的なネットワークの中で、専門職は、必ずしも他のアクターの声に対する傾聴に徹するのみでなく、自らの声を発信していく必要性が感じられている。

もちろんそのアクターには住民の方もいます
し、それだけではなくて専門機関ですね、今の
社会福祉法という専門機関、それから行政です
よね。企業とか、そんな所も関わってきますよ
ね。その全体のバランスの中で、欠けてるとこ
ろっていいですか、弱いところをやるのが社協
[社会福祉協議会の略]じゃないかと。その弱い
ところをカバーすることによって、全体として
地域福祉が進んでいくといいますか、その推進
役になっていくのが社協だと思ってるので、僕
は別に住民だけにこだわるという発想はない
んです。… それは住民の意見を聞かずにやる
んではなくて、ちゃんと住民の意見を普段から
聞いておいて、そのベースがあるから行政に対
して瞬時にものを言えるっていう、その関係じ
ゃないかと思ってるので。だから余計に、住民
だけではなくて専門機関の意見も普段からス
トックしておいて、ちゃんと進むべき道に導い
ていくっていうのが社協の仕事じゃないか
と思います。だから、住民だけにこだわって
はいです。やっぱり専門職である限りは、根拠を
持って、信念を持ってやっていかないとけな
いし、地域の方の話も聞きつつ、じゃあ自分が
どうそれを再構築していくのかっていう、やっ
ぱりそこが専門職やと思うので。(A10-2)

地域福祉を担う主要なアクターとしては絶対
行政もあるべきなので。ただ行政としてできる
ことって、社協みたいにフットワーク軽く、で
あるとか、NPO さんみたいにある意味フランク
に動けるっていうことはやっぱりできないん
ですよ。(08)

住んでる人っていうことではなくて、もちろん、

そこで働いてる人とかっていうこともそうだろうし、そこにいてる人っていうことでいくと、必ずしも住むっていうことでは全然ないとは思いますがね。むしろ、今の時代であれば、そういう住んでる人以外の力ってというのがすごく大きいと思うので、そういう人たちがどうつながるというか、緩やかにつながることができるかっていうことだとは思いますがね。(D19)

④地域の多様性の重視と格差の是正

第四に、X市内における地域ごとの地域特性の差や違いを多様性として捉える語りとともに、格差として捉え是正しようとする語りが見られた。地域特性が生じるエリアとしては、小学校区や行政区画が捉えられていた。地域ごとの多様性は、より広いパースペクティブから見れば多様性だが、それを当該地域に固有の特性として捉えてしまうと、支援を支えるパースペクティブが狭隘化してしまう懸念が抱かれていた。ある地区は、特定の「文化」を共有し維持するエリアとして認識されている。地域間の差異を生じさせているのが地域固有の「文化」だというのである。この地域に内在する「文化」は、必ずしもポジティブな資源だとは捉えられていない点が注目される。住民においても、「自らの地域は特殊である」とする感覚は、コミュニティに対する帰属意識を強化するというより、自らに対するスティグマの付与をもたらしかねないと捉えられている。

Xの場合は面白いのが、小学校区をまたいでしまうと、割と文化が違ったりしますので、共同して何かするっていうのがないんですよ、ほとんど、小学校区同士が。区域はあるんですけど、小学校区同士が協力することがないので、ま

めにくいですよね。だから日常生活圏域で何か地域支援とか地域づくりをしようと思っても、なかなかうまくいかないっていうのがXの特徴なんです。(A3)

ニュータウンの文化と、この辺のX市Y区とかX市Z区とかの文化って、やっぱ違いは大きいんです。どちらかというと、Z区とZ区以外という差はおっきいかなと思ってます。それは住民感情としても、Z区と他はちょっと異質な感じがします。つながり方も異質ですよ。…あまり干渉されたくないっていう前提もあるし。でも今のニュータウンって、格差がすごい広がってるんですよ。(B7)

課題になるのはエリアによる格差ですわね。うちの前は隣の校区やから、こんなことしてくれるのにみたいな。してくれるのについていう言い方がいいかどうかは別にしても、そういう差があることをどうするんやっていう話はあるから。それはそれで、ある程度しょうがない部分もあるし。(D6)

3. 地域マインドマップの作成

(1) 作成方法の概要

研究方法の3つ目として、インタビュー調査を踏まえた地域マインドマップ(各インタビューが抱く地域観の概念図化)の作成を試みた。作成にあたっては、あらかじめインタビュー調査結果と逐語録を精読した。そして、地域マインドマップの作成はインタビューごとに行った。実施期間は2025年4月であり、大阪公立大学の地域福祉ゼミナールに所属する学部生3名、院生1名、第一著者(研究代表者)である東根の計5名で行った。

（２）作成の過程

まず、逐語録の精読から各インタビューが抱く既存の地域像にまつわるキーワードを抽出して、マジックペンを用いて正方形の付箋紙に記入し、模造紙上に貼り出した(図 1)。つづいて、キーワードの抽出が飽和したところで、ブザン(2005)を参考に、マジックペンと色鉛筆を用いて、放射状の広がりを意識しながら概念図化を行った(図 2)。最後に、概念図化に至るまでの過程をふり返り、困難であった点や改善すると良い点などを出し合った。その後、日を改めて、一連の過程と出し合った意見をもとに、東根と第二著者(共同研究者)である吉田で、専門職同士により地域マインドマップを作成するプログラムの開発に向けた検討を行った。

なお、模造紙上の概念図(地域マインドマップ)については、プログラム開発に向けて専門職をはじめとする関係者と共有しやすくするため、デジタル化を行っている(図 3・4)。



図 1 逐語録の精読とキーワードの抽出

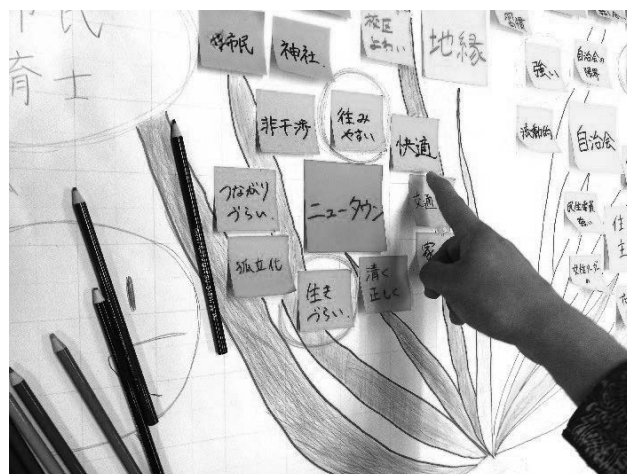


図 2 概念図化の過程

各専門職が有する地域観は、意識化したり、他の専門職と共有される機会がないのが現状である。だが、地域マインドマップとして各々が抱く地域観を概念図化し、ワンシートに可視化することで、各専門職の地域観の共通点だけでなく「ズレ」が浮かび上がり、共有することが可能となる。

住民や市民の生活や暮らしを捉えるほか、自治会をはじめとする地縁組織に関する語りは共通していた。一方で、語られる地域の大きさ(エリア)は自治会、校区、日常生活圏域、行政区画、X市外を含むより広い行政エリアなどさまざまであり、固定化されたものではなく、専門職の役職や職務内容に影響を受けながら日々更新されている様子がうかがえた。動的に地域像が再編成され続けていることから、専門職が有する地域像が、オートポイエーティックな自己産出的システムである可能性が示唆される。

【おわりに】

本研究では、地域福祉実践をめぐる地域像の協働的創出プログラムの開発に向けた必須の前提作業として、①先行研究レビュー、② ①にもとづく専門職に対するインタビュー調査、③インタビ

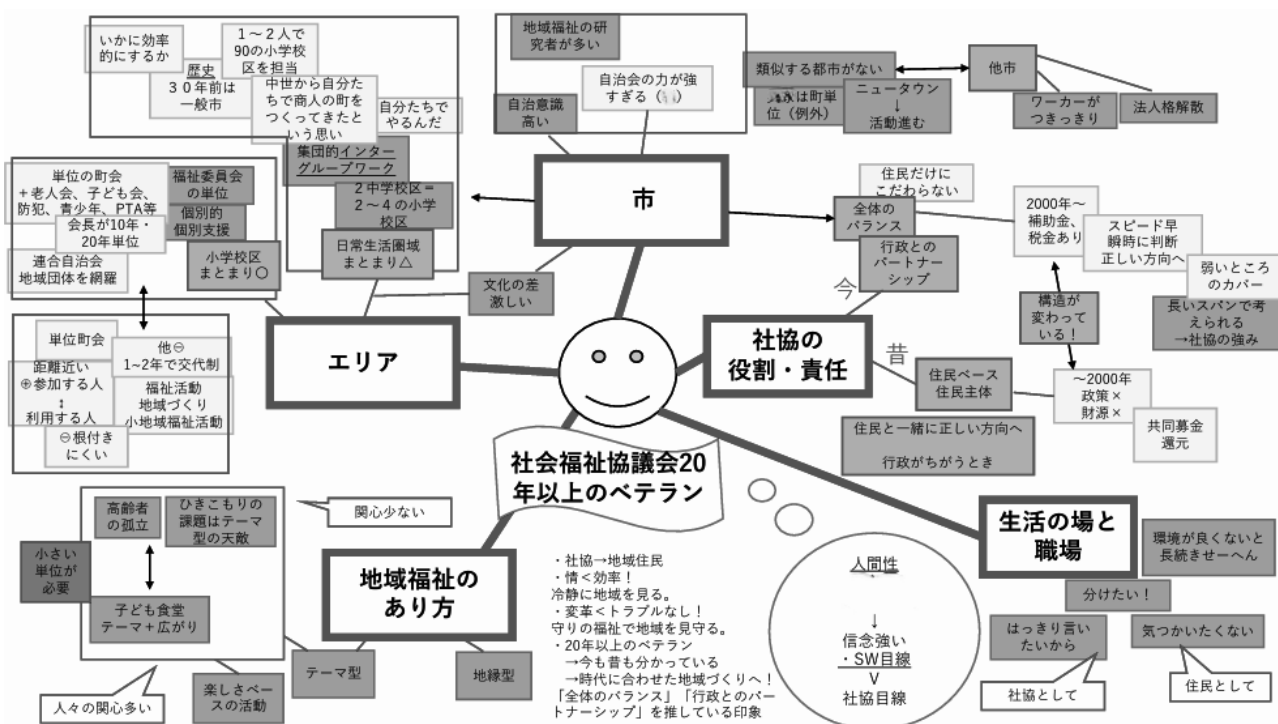


図3 デジタル化した概念図の例1

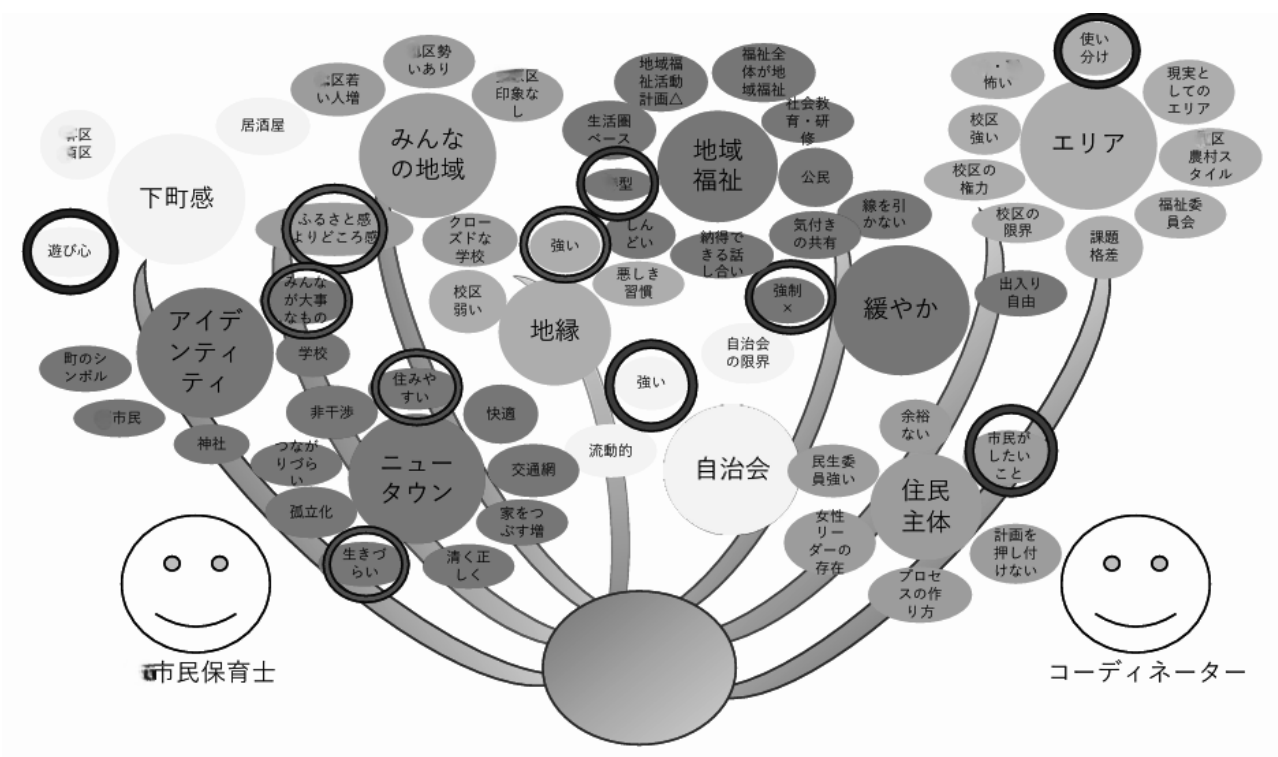


図4 デジタル化した概念図の例2

ュー調査をもとにした地域マインドマップの作成を実施した。

先行研究レビューにおける「都市」は、「アトム化」と「マス化」という双方の視点からの規範的・否定的な見方が残存しつづけることで、地域福祉をめぐる悲観的な言説が生じやすく、積極的な要素を抽出しようとする言説の磁場が生じづらい状況にあった。このような「アトム化」と「マス化」をめぐる語りはインタビュー調査においても共通していた。一方、先行研究レビューでは言及されていなかったインタビュー調査で語られる専門職の地域観の特徴として、都市郊外部特有の地域の権力構造があった。さらに、地域福祉研究において重視されてきた住民(居住者)主体だが、インタビュー調査の語りでは、より拡張的な地域福祉ネットワークを再構築する主体として専門職自身も位置づけられ、専門職自身も自らの声を発信していく必要性が認識されていた。

住民(居住者)が地域の現状や将来像について話し合う場などにおいて、「裏方」としてファシリテートすることが暗黙的に期待されてきた専門職だが、より広いパースペクティブから、日々、主体的に地域観を醸成していることがうかがえた。

今後実施を予定している、専門職による地域マインドマップの作成作業においては、専門職同士で地域像を協働的に創出するために、あらかじめ地域観が連想されやすくなる複数の「刺激語」を準備し、専門職同士で「刺激語」を通じて地域観を描いていくプログラムの可能性が考えられた。たとえば、4名のインタビューーに共通する語りでありながらも、内容はインタビューーにより差異があった「地域の大きさ(エリア)」や「地域の主体」などである。さらに、とりわけ都市郊外部では「ニュータウン」を「刺激語」とすることも想

定される。具体的な「刺激語」の抽出については、今後の研究課題である。

なお、本研究では、地域マインドマップの作成を試行的に第三者である学生・院生・第一著者(研究代表者)で行ったが、インタビュー調査をもとにした地域マインドマップを専門職に共有し、フィードバックを得ながら、今後は専門職同士で地域像を協働的に創出することを試みる。専門職自身が行う地域マインドマップの作成は、各専門職に内在する地域観を可視化するという評価(省察)に留まらず、地域福祉実践の目指すところ(目的・理念)と実践のやり方(方法)という方略を案出するための資源になり得ることが期待される。

【謝辞】

本研究に関して、快くご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。

【参考文献】

- 鯉坂学(1998)「現代都市の動態と危機」『地域福祉研究』(26), 1-10。
- 一柳豊勝(1974)「仏教と社会福祉：都市における地域福祉と仏教思想についての考察」『同朋大学論叢』(30)17-32。
- 岩田正美(2011)『リーディングス日本の社会福祉6：地域福祉』日本図書センター。
- 右田紀久恵(2005)『自治型地域福祉の理論』ミネルヴァ書房。
- 岡村重夫(1970)『地域福祉研究』柴田書店。
- 金子勇(1990)「地域福祉と現代都市社会学」『北海道大學文學部紀要』38(2), 179-254。
- 武川正吾(2006)『地域福祉の主流化』法律文化社。
- 竹中和郎(1970)「都市的偏倚と地域福祉の課題」『社会福祉研究』(7)15-21。

トニー・ブザン, バリー・ブザン, 神田昌典訳(2005)

『ザ・マインドマップ』ダイヤモンド社。

野々山久也(1980)「地域福祉システムの形成：その現状と課題(共同研究：大都市構造の変化と福祉問題)」『総合研究所報』6 (1), 1-17。

畠中宗一(1992)「大都市における地域福祉の可能性」『大阪市立大学生活科学部紀要』40, 255-263。

東根ちよ・吉田直哉(2025)「地域福祉研究における「都市」認識の変遷(2)」『敬心・研究ジャーナル』9(1), 頁未定。

吉田直哉・東根ちよ(2025)「地域福祉研究における「都市」認識の変遷(3)」『敬心・研究ジャーナル』9(1), 頁未定。